

憂鬱から啓蒙へ

上野直藏

著作作品は作家と離れてあり得ない、逆に作家は著作作品を離れてあり得ない。この自明にして重要な命題を今もう一度こゝにくり返し記しておいて、マッシュ・アーノルドの著作を通して彼の人間的なやみ、いかり、よろこび、のぞみの閃きを把握し、これを彼の心理的展開の跡としてその意義を辿らうとすること、これが本稿の意圖である。

アーノルドは批評家として著名であるが、明確に系統立てた仕方で批評論を後に残しては居らない。むしろ、そのやうに出来なかつた人であつたらう。彼の有名な“Criticism of Life”といふ言葉にしても、ふと思ひつくまゝに其れが奇抜で警句的であるところから好んでしばしば使用したのだと思はれる。しかし乍ら、彼は自作のこの言葉に定義を與へてゐないけれども、自らはよく理解してゐたのであつた。彼の「ワーズワース論」、「バーンズ論」などに見うけられる具體的な例證によつて充分にそれと窺ひ得るのである。これは一例である。しかし、實感を重んじ抽象をひどく嫌ふ性向はアーノルドに深く強く貫いてゐたものであると共に、度々彼の明言するところであつた。さればこそ、テイ・エス・エリオットは「アーノルドは批評家と言はんよりは、むしろ批評の重要性を唱導した人であり、思想を創り出した人と言はんよりはむしろ思想を普及させた人である。」——“The Perfect Critic”——と適切に彼の演じた役割を指摘し、或は又

「アーノルドは『教養と無秩序』『友情と花環』などでは我々を引きつけるが、……今日我々がアーノルドを求めるのは師として仰ぐためではなく、慰安を求めるためと我々と近しい見解を抱いてゐた友として求めるのである。」

——“Arnold and Pater”——

と、こゝでもアーノルドの社會批評論はわれを誘ひ寄せつける熱を持つてゐるけれども、その思想には明確性も完全性も缺如してゐると喝破してゐる。

アーノルドは事物を分析的に見てその骨格を示したり、科學的な正確さを以て敘述したりする能力に乏しく、むしろ血の通ふ具體的な言葉による表現に秀れてゐるところから考へれば、彼の才能はいはゆる詩人的であつたといへよう。成程、彼は少年時代から前半生にかけて詩作にいそしんだ。そして人口に膾炙する作品も少なくないのである。それでは、事實、彼は優秀な詩人であつたらうか、否、多くの批評家の指摘してゐる様に、彼は詩人として必要な感覺の豊富さに恵まれず、特に音樂的要素に缺けてゐた。作品全體に機械的な反覆が多く、態度は消極的で、憂鬱の色ありと濃いものがある。少しく作品に即してこれを見てみよう。

をのがじし力及ばぬに、世々

深き戀おもひせんとあへぐは何か故、

眞ならんと望みつゝ心冷えゆくは？

——人もてあそぶ宿命いらいらを答知るらむ。

身内に繋がれて小止みなく争あらがふは

水の心と、火の魂。

いのちのはせばにて人に負はされたるは

あてどなき不退轉たいてんののぞみ。

——宿 命——

こゝでは力の限りを盡くして愛しようと思ひつゝも心の熾しく燃え立たないのを歎じ、次では戀人と久しく離れて暮すにつれて去る者を日々疎んずる心への歎息が見られる。

何とのろはれた人の世か、
いよゝさかしい思考と感情が
いよゝ氣高く澄みまさつても
頭腦から熱情を拭ひ去ることのないに、

日々がほんの少しづつ塵を持ち來つて
すぐ充ちる心を滿たすと、
吾等は忘れようとはあらで
否應もなく忘れてしまふとは。

——別離——

或は

この青い丘も、このせゝらぎも
動いてゐたが、それは遠い昔のこと。
ざわめく青春の熱は鎮まり
靜謐の中にこそよろこびを得る。

——ラインに寄す——

このやうに彼の詩作品に漲る憂鬱、あきらめの態度はどうしたところにその原因があるのであらうか。或は、視學官として俗務に追はれ勝ちで己が詩才を枯渴させねばならなかつた詩人アーノルドのものがきであると言ふ。實際、彼は一八五一年の始め、即ち二十九歳の春に視學官となり、生活の安定をやゝ得たのであつたけれども、それが極めて多忙であつて、ミューズへの彼の憧憬と相容れぬものであつたのは彼の手紙がよく語つてゐる。Suburyから妻へ宛てた手紙に「二時少

し前に當地着、サンドキッチを喫べてから學校に行つた。何故だかわからぬが、僕は今し方たしかにこの視察といふ事に特に堪へ難いもの感じて居る。然し、こんな氣持が嵩じては大變だから職務に身を入れなくてはいけない。今日は午後半日、外交官になつてそなたと端西の Berne に住む事を空想してやまなかつた。さうした生活と、このをやみなき單調無趣味な學事視察と、何といふ相違であらう。」(矢野博士譯)とあることから推測しても視學の勤務が劇しいものであつたと考へられる。或はまた、かの憂鬱の原因は、母への手紙の一節にある如く「公平にいつて私はテニスより詩的情緒に於て劣り、ブラウニングより知的熱情に於て劣つてゐると言へるかも知れません。」(尤もこれに續いてテニスとブラウニングの兩者の長所を併せ持ち……云々と抱負が述べられてゐるが)と自己の素質に詩人としての自信の持てぬ所によつたとも言はれてゐる。では、若し視學官の劇務さへなければアーノルドはもつと詩才をみがき得て、その結果詩人としての己が才能に自信を抱けたであらうか、さうとは考へられない。けだし彼の詩には成長がなく、生來その方面への才能は貧しかつたと思はれるからである。或は又、かの憂鬱は、若き日に、彼が詩作の上で Marguerite と名づけてゐるフランスの乙女との戀の成就せなかつた悲しみのなごりであるとも言はれてゐる。或は、デューンズ (The Cambridge History of Eng. Lit.) の語つたやうに、彼の詩にみちた「憂鬱は唯、何か體質遺傳的なものとして説明する外仕方がなし」のかも知れない。或は又、それは彼の詩「ドーヴァ海峡」にみられる科學思想の發達につれて宗教に信をおくことの出來なくなつた知的な青年の時代的な悩みであつたのかも知れない。

アーノルドの詩に充滿せる憂鬱の因つて來るところが、多忙なる俗務であれ、自己の詩才に對する疑惑であれ、失戀の痛手であれ、遺傳であれ、また、時代的な悩みであれ、「Sohrab and Rostum」などの比較的客觀的な題材の詩作品を除外して、主に自己を詠つた抒情詩を見ると、その憂鬱の原因は、別離 ("Absence") の一行が最も端的に表してゐる。即ち、

I struggle towards the light

と魂の平安と知識の據所を求めゆく孤立孤影の追求の生活のわびしさに女性の愛を求めつゝも全身全靈をなげうつて浸れない理性人の悩みである。

ごめんよ、ごめんよ、

あゝ、マルグリッド、この双の腕もて

そなたを抱かうと差しのべもしよう。

だが、御覽、それも役には立たない。

虚空にわが手のべて

そなたを求めはするが

二人の間を海がへだてゝゐる——

我々のめい／＼に違ふこしかたが。

別
れ

それは失戀のせつなさといふよりはむしろ自己の實踐力の貧弱さ、熱情の不足のあまり相手を失望させる歎きである。

かうした詩作の時期は一八五三年（三十一歳）の詩集の出るまで續いた後、批評文への轉換が彼にやつて來た。即ち憂鬱の詩人アーノルドは轉じて啓蒙の批評家となつたのである。この轉換の動機は何であつたか。それに對しては、たとへばアーノルドは彼の時代が詩作に適さないと感じたこと、また彼に内在する素質の必然的な展開、更に又、視學官生活が詩想を練る閑暇を妨げたこと、又、それ等全部の理由から散文に移つたのだ、などの答が與へられてゐる（成田成壽氏「アーノルド」）。これ等に加へて、彼の活動が自己中心的な詩作から離れて、文藝、社會評論に向けられるやうになり、或る意味に於てそれは自己解放がなされたのであつたが、その原因の一つとして青年時代から親しんでゐたゲーテ並にハイネの影響を考へることを忘れてはならぬであらう。アーノルドに依れば、ハイネはゲーテの第一の後繼者であり、この兩者の最大の功績は「人間性の解放」であつた。この「人間性の解放」といふことが、彼にとつて如何なる意味を有つてゐたかは「ハインリッヒ・ハイネ論」によつて知ることが出来る。ゲーテが如何にしてヨーロッパを古い思想から近代思想へと轉換せしめたかをゲーテ自身の言葉、即ち「予を通じてドイツ詩人達は、人間は自己の内部から外部に向けて働きかけね

ばならぬこと、如何に歪めようとも自己の個性を顯す外はないと言ふことを知つたのである。云々」を引いて説明し、さらにハイネも亦當時の外的な物質的なものに重きをおく Philistinism (ハイネ論で始めて用ひられた語、「彼等(命名者は敵手(物慾人)を退屈な人々、單調な日常生活の奴隸、光の敵と見做し、愚鈍で重くるしい、しかし同時にひどく強い手合だと思つた」と説明してゐる。)に反抗して眞の人間性の内なるものに規範をおけと人間性の解放を叫び、フランス革命の眞の子であつたといふ點を、彼アーノルドはカーライルを思はずほど激した筆で熱情をもつて語つてゐる。

ゲーテ、ハイネによつて教へられ來つたこの「人間性の解放」の思想が、視學官の職を通してアーノルドの眼にいよいよ明瞭に映つて來た當時の社會——Barbarians, Philistines, Populace の充ち満ちてゐた英國の社會に對する忿懣と内面的に結び合つた結果、彼をして啓蒙批評家へと轉換せしめたと考へられるのである。さきにもた抒情詩ですらジョージズ(前出)は「彼の詩の中で、豫考されぬ無縫天衣の抒情的歡喜のほどばしりと思はれるものは一つもない」と評し、或は又、エリオット(M. Arnold)は「マルグリッドは精々のところ影の如き存在にすぎず、熱情を以て戀はれてもゐなければ、また精密に觀察されてもゐなくて單に愁歎の材料に過ぎない」ときめつけてゐる。これに反してアーノルドが社會狀態に對する公憤を洩らす散文となると、俄然熱は加はり、「彼が非個人的な問題を取扱ふと彼の熱情は實に信服力がある」とエリオットもこれを是認してゐる位である。しかし、この熱情は彼の主張と實際とに矛盾を惹き起す結果となつた。即ち、彼は散文の生命を「形式」「手段」「正確」「均整」「整備」「整備」におき、思考し表現に當つて「明晰」「正確」「適切」を鼓吹しておきながら、實際は批評論に於て、最初にも述べた如く、警句的な言葉を思ひつきで使用し、自分自身はその意味をよく知りつゝ飛躍的な説明しか與へなかつたのであつた。エリオット(Arnold and Pater)はこの矛盾を適切に指摘し、兩者の作用を峻別してゐる。「その(教養と無秩序の)思想は實際(カーライルの『過去と現在』又はラスキンの『この最後の者にまで』と同様に)明白といふわけでもない。——これは何故アーノルド、カーライル、ラスキンがあれ程甚大の影響を有ち得たかといふ一つの原因である。といふのは思想が明確であつたり、完全であることがその傳播を助けるとは限らないから。アーノルドは實に明確とか完全などといふものを與へたのである。彼は正確と明確との一種の幻影を創り出した。即ちこの二つの性質をスタイルの理想であると主張したのである。」アーノル

下が批評論で吐きつける過度に激越な言辭には、あの嘗ての憂鬱の詩人のものとは考へられぬものにして、出會ふのである。「Influence of Academies」, 「Function of Criticism」, また *Culture and Anarchy* などには特に劇しい。たとへば、

Why is all the *journeymen-work* of literature, as I may call it, so much worse done here than it is in France? ("Influence of Academies")

とイギリス文壇、殊に新聞用語の Provinciality を攻撃するあたり、或は「批評の職能」に於て自國民の優秀性にうぬぼれてゐる Philistines の代表者達 Charles Addeley 卿や Reobuck 氏に反駁して、ティンガムに起つた私生兒殺害事件の例證をあげてゐるあたり、言葉の過ぎるかに思はれるほど強烈に疊みかけてゐるのを認める。

かくて、あくまで自己をどう／＼めぐりしてゐる限り、生彩を缺き、快々としてゐたアーノルドが、一たび當時の産業隆盛の結果、自己満足によひしれて教養を忘れた英國國民に對して公憤を吐露するとなれば、自己を投げ出して如何に熱情的に、矯激にすらなるかを知つた。この公憤が、とりもなほさず文藝批評に於て彼の明哲を曇らせ、没利害的なるべき批評にあつてバイロン批評の場合の如く彼自身の批評論を背馳させてしまつたのであらう。しかし、よく思へばこれは無理からぬ人間の感情の表出であると思ふと同時に、又如何に批評家にとつてアイ・エイ・リチャーズの所謂 irrelevant association を除くことの至難事なるかを痛感するのである。アーノルドは「バイロン論」に於て、「バイロンは詩のスタイルに餘りに無頓着である。忌憚なく言ふならば、彼はあまりに無精、杜撰、不適當で、且つ用語の正しい使用法とか、完全な扱ひ方などに對する眞の詩人の繊細な熱情にかられることが非常に少なく、この詩人的天才の代りに野蠻人の鈍感さを持ち合せてゐると言はれても仕方なからう。」と、これまでバイロンが過大に評價されたのを認めながら、最後に「ワーズワースとバイロンの二詩人は此世紀の英國詩人中、詩作に於て傑出して第一位にあり、双璧として残ることゝ思はれる。」とほめそやしてゐる。一體、アーノルドによれば「偉大なる詩とは偉大なる "Criticism of life" が表はされてゐる詩である。」のである。この "Criticism of life" は唯單に人生觀を骨格のまゝぶちまけたものを指すのでなく、又詩人の人生觀

のプロバガンダであつてもならない。否、眞の「詩的人生批評」とは詩人の崇高な人生觀が「詩的美」、「詩的眞」の法則にあてはまつて表はされること、即ち、形式と内容の美しさとが一分のすきもなく合致して、眞に血と肉とを附與せられた生ける感情發露でなければならぬのである。この事は彼が“Study of Poetry”で試金石として擧げた多くの詩の行が教訓詩ではなくして、形式美を立派に備へた或は抒情的な或は史詩的なものであるのに徴しても明かなのである。それにも不拘、さきにも言へる如く、バイロンの詩のやうに用語も整はず、形式もあまり優れないものをワーズワースの詩と共に何故、賞讃を惜しまなかつたのであらうか、それは他でもない。バイロンが當時の所謂 Philistinism に憤りを覺えそのために社會に反抗の炎をあげたが故であつた。こゝに、アーノルドその人の弱點、即ち理想としてはギリシヤ的明哲を標榜しながら、實踐となるとこの明哲を持つることの出来なかつた矛盾が現はれてゐる。もつとも彼自身では己の批評に於てこの矛盾せる二面のあつたことに氣附かなかつたであらう。

結局、後半生のアーノルドには社會的な關心があまりにも強く彼自身の中に喰ひこんでしまひ、そのため文藝批評に持たざるべき規準は混亂せしめられたのであらう。この點についてエリオット (“M. Arnold”) は「彼は機會さへあればその度毎に自己の道德觀、宗教觀を述べ得るやうな題材を選んだ」と評してゐる。アーノルドにはエリオットの批評態度の如くあくまで理性的に如何なる問題に對しても冷靜な判斷を狂はさなかつた透徹した客觀的態度はなかつたとはいへ、單に訓話註釋的な域を遙かに脱して廣く宗教、社會問題中に我々の生活指導原理を探求して世人を指導せんとした點に於て、エリオット、マリイ等、現代批評家の先驅をなすものがある。彼の憂鬱の詩人から啓蒙の批評家への轉換のうちには現代の我々から見ても意義深きものあるを思ふべきである。

× × × × × × × ×